

研究報告

介護福祉士実習指導の成果と課題

関谷 栄子 西方 規恵 土川 洋子 落海 文子
馬場和加子 鷹野 直子 柴生田美里 八角かおり

はじめに

白梅学園短期大学においては、1987年4月に専攻科福祉専攻（1年課程）で介護福祉士養成に加え、1998年4月には福祉援助学科（2年課程）で介護福祉士養成課程を開始し、これまでに約480名の卒業生を輩出している。卒業生は高齢者や障害者の施設及び在宅介護の中堅的な職員として活躍している。

白梅学園の教育目標はヒューマンイズムの追求である。福祉援助学科の教育目標はヒューマンイズムの具体的な実践者である「介護福祉士養成」のために専門的知識及び技術を教育することである。それだけでなくヒューマンイズムの理想である人間の尊厳を尊重し、人間が生涯発達し続けるという立場で、人間の可能性を追究していくことを支援するものと位置づけて、全人間的教育を行っている。

学生自身は発達の過程にあり「自分探し」を模索しながら自己の完成を目ざしていく。自分を大切にし、かつ他人を尊重する福祉実践者として学生をいかに育てていくかが学生と教員の協同の課題である。

福祉援助学科では教育目標を達成するために、介護福祉士養成課程に必要な教育課程よりもさらに390時間多い2040時間（合計82単位）というカリキュラムを課しているため、忙しい学科であるとの印象を持たれている。学生は18-20歳の青年前期にあり人格完成を目指しつつ社会へ踏み出す準備期間にある。学生の多くにとっては最後の学生生活である。福祉援助学科の教育研究スタッフは専任教員5名、実習助手2名が教育指導に当たってきた。加えて介護実習と実習指導を担当す

る非常勤講師2名を採用しており、実習指導、介護実習を担当する教員は7名である。資格は看護師4、介護福祉士3である。

2005年度からは福祉援助学科に所属していた実習助手が実習指導センター発足に伴い実習指導センター所属になった。

対人援助の専門職として高潔な人格を要求される介護福祉士の養成機関としてはどのような教育指導力を必要とされているのか。中でも介護実習450時間（10単位）及び実習指導90時間（3単位）は全体の約4分の1をしめる根幹的な科目である。本調査においてはこれまでの実習指導教育の成果を明らかにし、今後の課題を明らかにすることを目的とした。また、毎年卒業予定者を対象に学園生活を振り返り、自己評価のための調査を実施し、福祉援助学科の教育について学生側からの評価として位置づけている。その結果、おおむね授業の評価はよい。特に実習指導及び介護実習については、よい教育効果があるとの結果が得られた。また教育上の改善すべき課題が抽出されたので、今後の福祉援助学科の教育指導内容について検討して、教育指導方法の改善を図りたい。

1. 調査の目的・方法

卒業間近に自分が受けた教育内容を振り返り自己評価を行う。また実習を含む福祉援助学科の教育に対する学生からの評価を行うために質問紙調査を実施した。実施期日は2005年2月、対象は2003年4月に入学し2005年3月に卒業を控えた介護福祉士を目ざす短期大学生74名。回答数は54名（73.5%）であった。男女比は男子8名（14.8%）女子46名（85.2%）である。

2. 調査結果

調査の結果を以下の視点で分析した。

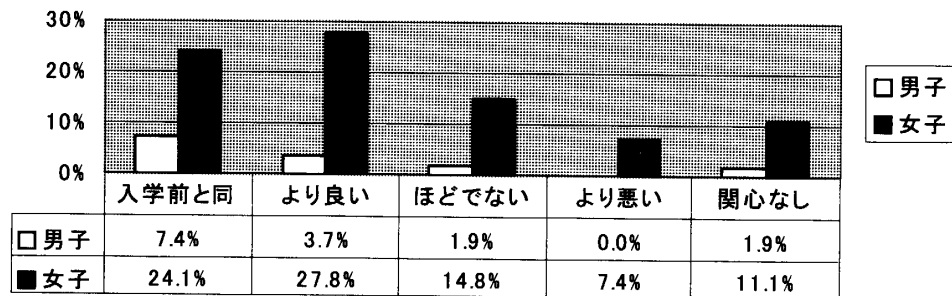
- 1) 白梅学園のイメージの変化
- 2) 授業に対する満足度
- 3) 介護福祉士の目的意識に関する変化
- 4) 学園生活の満足度
- 5) 介護実習・実習指導の満足度
- 6) 実習指導室に対する満足度

1) 白梅学園のイメージの変化

白梅学園においては教育方針であるヒューマニズム精神の通り学生の利益を尊重して学生生活の自由が保障されている。自由な校風を好んで入学したという学生も多い。入学前のオープンキャンパスでの高校生からも、自由な雰囲気と教員と学生との親密な関係を好ましいと受けとめられて

いる。イメージの変化を問う設問では、「入学前と同じ」と答えているものは31.5%（男子7.4%、女子24.1%）である。また「入学前よりもよい」という人は31.5%（男子3.7%、女子27.8%）が答えている。計63.0%がよいイメージを持っている。（図-1 白梅のイメージ）悪いイメージに変化したものは7.4%である。「それほどではない」という人が16.7%（男子1.9%、女子14.8%）である。より悪いイメージを感じているものは7.4%、「関心なし」は男女計13.0%である。25.1%の人が「悪い」または「それほどでない」と感じている。理由は「授業がきつい」「大学らしくない」「忙しすぎる」などである。この層に対する教育的働きかけを行い、学生生活に魅力を感じてもらおう努力が必要である。

図-1 白梅のイメージの変化

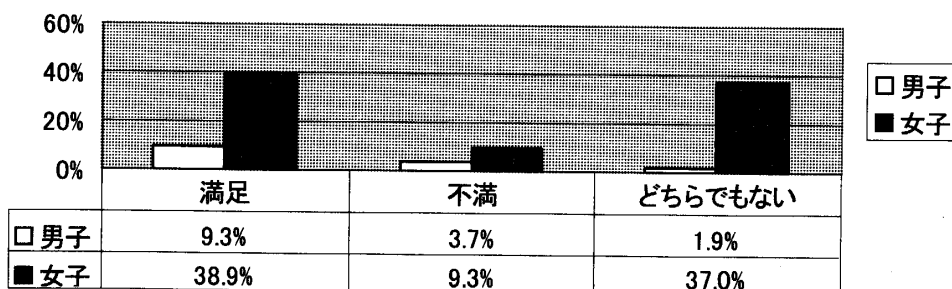


2) 授業に関する満足度

授業の満足度は図-2に示す。満足48.2%（男子9.3%、女子38.9%）で、不満13.0%（男子3.7%女子9%）、どちらでもない38.9%（男子1.9%、女子37.0%）である。満足しているものは半数弱である。1割強は授業に「不満」をもつ。「どちらでもない」を加えると半数強が授業に満

足感をもっていない。学生の知的探求心を満足させることができないということは有意義な学生生活とはいえない。この層への対処が必要である。学力格差が広がっていることは福祉援助学科も例外でなくすべての学生が満足できる授業運営をするには困難が大きい。授業をする際にはわかりやすく、しかも根本を押さえた授業を工夫しなければ

図-2 授業の満足度



ばならない。学生の理解度をモニタリングしながら、教材や授業に興味をもたせる内容にしていく努力が求められる。必修科目は一定の教授すべき水準が決まっている。重要な項目は精選し、繰り返しポイントを押さえる。実例などで理解を深めるよう工夫が必要である。小テストやミニレポートを課し理解度の評価をしながら授業展開を行っている。理論的知識、判断、理解力の習得については関連教科目の担当教員とも連携をとりながら様々な角度から教授していくよう協力を行うことが課題である。

「介護技術Ⅰ、Ⅱ」は演習として日常生活の直接支援行為となる技術指導をおこなう。学生たちは他人の身体にふれることすら、初めての経験というものもある。口腔ケアの利用者役に際して、他人に口の中をのぞかれることにためらう学生もいる。移動技術では、他人に近づき抱きかかえるなどの基本的なボデイメカニクスについて体得する。相手との一体化がなければ重心移動ができず、利用者を不安にさせたり、転倒させてしまう危険がある。このように介護技術習得については一人ひとりの学生の学習状況を点検し指導する。学生はその経験を通じて、自らが主体的に動かなければ状況を変えることが出来ないということを自覚する。自らの動きを自己洞察するために介護技術のレポートを課し、学生自身の行動の振り返りをしてもらい自己評価を求めることは重要である。

「介護概論Ⅰ」においては夏休みの課題として高齢者や障害者とのコミュニケーション体験を奨めている。身内の高齢者とのコミュニケーション経験により、好む話題についての学びや傾聴について学び、実習時のコミュニケーションスキルの習得に役立っている。

2年次には「形態別介護技術」において、精神障害者や身体障害者の当事者を授業に招き、話をしていただいている。こうした経験により利用者理解が深まり、介護過程を進める際に利用者を包括的に理解する能力が深まる。

また白梅独自の科目で「遊びの造形」や「シニ

アの音楽・ダンス」においては、高齢者や障害者の趣味活動を援助する方法を学ぶ。「レクリエーション活動援助法」でもレクリエーション技術を学ぶが、幅広い援助手段を持つことが実習中に利用者との介護過程の中で文化的なケアとして応用しQOLの改善に役立っている。

「医学一般Ⅰ、Ⅱ」は、難解な授業と学生の不満が多いが、実習および社会人になってから、もっと勉強しておけばよかったとの反省がなされる科目である。実習指導の中で学生に事前・事後学習として学ぶよう動機付けをおこなうことが必要である。

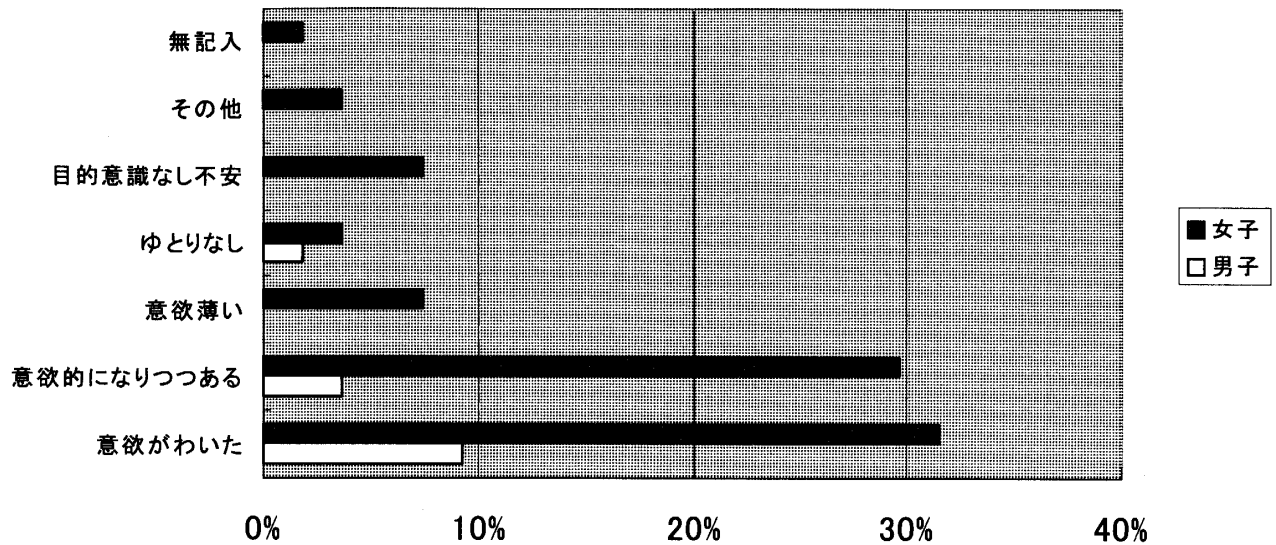
3) 介護福祉士への目的意識

図-3は介護福祉士としての目的意識が持続しているかどうかを示している。目的意識が強まり意欲的になっているものが33%である。意欲がわいてきたものは40%、計70%の学生は目的意識が高まったと自覚している。目的意識がなく不安というものは7.5%、ゆとりがないと答えたものは6%、意欲が薄らいだと答えたものは7%、計20.5%は意欲がなく目的意識が薄れている。本調査が卒業間近に実施されたのでほとんどの学生は進路を決定しており、特に介護福祉士として就職を考えているものは目的意識が確立している。しかし中にはモラトリアムとして学生のままでいたいと思うものもあり、就職か大学へ編入するかなどで悩むもの、他の資格に挑戦したいと思うもの、腰痛などで介護福祉士としての就職を断念せざるを得ないものなど目的意識がゆらぐものもある。この学生たちに対しては相談を繰り返しながら自己決定できるようサポートしている。卒業研究ゼミナール担当教員が進路指導の全般的な担当を行うが、介護福祉士の先輩である実習助手の助言や指導も得て学生たちの気持ちをくみとり円満な自己決定を引き出している。学科会議の場で情報交換を行って連携指導をしている。

4) 学園生活への満足度

学園生活への満足度では、満足しているもの20人(37.3%)、不満13人(24.0%)、無記入19

図-3 介護福祉士としての目的意識



人 (35.2%) である。満足している理由は教員が親身である 7 人 (13.0%), 教科に満足している 4 人 (7.4%), 実習に満足 5 人 (9.3%), 環境が良い 2 人 (3.7%), 友人ができた 3 人 (5.6%), などである。大概の学生は、授業内容、教員との人間関係、実習時の学び、友人関係、学園環境など様々なことに満足感を持っている。不満感をもつものは授業が難しい 2 人 (3.7%), 適性に不安 2 人 (3.7%), 授業中うるさい 1 人 (1.9%), 学費が高い 1 人 (1.9%), 施設が利用しにくい 2 人 (3.7%) などである。学力、適性などの本質的な福祉援助学科の教育目標に対し不適応を感じているものがあることを考慮し、より積極的に学生の気持ちを汲み取り教育指導することが必要である。不満を持つものに対しては補習などの個別対応をする必要がある。

学生の中には教員と親密な人間関係を結ぶことに自己の精神的安定を求めているものもいる。精神的な未熟さとマイナス評価するだけでなく、人間に対する関心の強さであると受け止め、福祉援助者の適性としての側面と評価する。学生が自らを未熟な人格であると自覚し、人格成長を目指して努力するように導く。他人との肯定的な人間関係を成立させるためのスキルを身につけられるよう指導する。学生の意欲のゆれや学習上のトラブルを把握し、ドロップアウトしないよう早期に対

策を施すことが大切である。学生情報を正しく早く入手し、学生との接点を持つことが肝要である。福祉援助学科においては実習指導室が学生の個々の動静を把握する拠点になる。就学上の課題を持つ学生を意識的に把握し、学科会議の場で集団的に討議し個別指導の方針を決する。合意を得た指導方針のもとにクラス担任、ゼミナール指導担当などが連携し学生指導に当たる。関連部門とも積極的に情報交換を行い、必要があれば保護者とも連絡しあう。個々の学生の情報を共有し指導に当たるのが重要であり、必要な場合には非常勤講師とも連携協力をおこなう。

5) 介護実習、実習指導の満足度

介護実習での学びは学生生活の中でも大きく、学生もよくそれを理解している。調査結果から判明した実習での学びになった項目についてあげる。受け持ち利用者の介護計画の立案・実施、記録の書き方についての学びは 11 人 (20.4%), 実習時の心構え及びマナーなどについての学び 13 人 (24.1%), 実習時の不安解消、親切的な指導が受けられた 7 人 (13%), 仲間の意見から学べた 5 人 (9.3%) である。(図 4. 図 5)

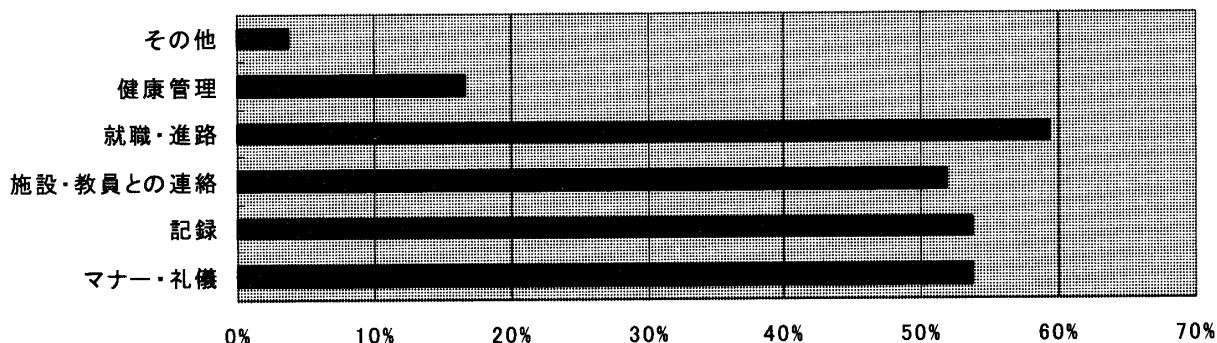
介護実習及び実習指導方法

1 年次の 11 月には介護実習 I を経験する。それに先立ち、実習指導 I の授業は 1 年次後期の 9

図-4 実習指導室は役に立ったか



図-5 実習指導室の役割



月から開始し、介護実習の目的・目標を理解させ、実習時の動機づけを深める。記録の書き方、コミュニケーション技術、マナーや施設職員との接し方、注意事項など細く指導する。学生は個別の自己学習目標を立て教員の指導の下で11月からの初めての実習にのぞむ。実習準備と平行して介護技術演習においては食事、排泄、着脱、移動などの実技課題を修得し、実習時に動けるよう学内で学生同士の学びを深める。自己の学習を深化させるために演習後のレポート作成を課している。挨拶、マナー、コミュニケーションスキルなどの、実習態度や心構えは介護技術の授業でも繰り返し学び、身につけていく。専門的な知識・技術の習得のためには、教科目と演習科目と実習とが連携されて重層的な指導として活かされることが重要である。

2年次の9月には最終段階の介護実習Ⅲ（4週間）を終えてから、実習指導Ⅲにおいて10月から12月までをかけて、実習で受け持った利用者の介護実践について事例検討レポートを作成する。学生は自己責任に基づき、課題に取り組み自己変革を遂げていく。自分が実施した介護内容を振り返り自己の介護目標を達成できたか、介護理論の

応用を展開できたかを考察する。この思考過程を経て内面的な変化を遂げ自分の介護観を持つに至る。思考過程では苦勞を伴うが、レポートの完成時には達成感を味わうことができる。事例検討会の場での発言内容にも進歩がみられ、自己の実施した介護について自信をもって語れるようになり、介護職員としての職業人的自覚が見られる。12月中旬には施設の指導者を招いて事例検討発表会を開催する。発表会は学生自身が運営し下級生や実習指導者を前に、自己の介護体験をまとめて発表する。後輩の前で意見発表の機会があると、上級生としての自覚と誇りが芽生えて成長した姿を披露することができる。2年間の学習の集大成の時期としてもっとも集中して勉強する。担当教員は学生が学習意欲を喪失することがないよう状況を把握し、肯定的支持的視点で学生を見守る。1月末には卒業研究ゼミナールの発表会があり、社会的には成人式を挟み社会人としての自覚と誇りが高まることも加わって自信獲得につながっていく。

自己評価が低い学生には自尊感情が養えるように面接を繰り返し指導する。教員側からの積極的な働きかけと支持的な個別対応が必要である。自

己理解するまでに時間を要する学生も多く、接触を深めよいところをのばす指導を行い、学生の学習意欲を高めていくよう援助する。

実習時の配慮・コミュニケーションスキル

最近の学生は、利用者とのコミュニケーションだけでなく、職員とのコミュニケーションにも苦慮し、円滑な関係作りに苦労しているものも多い。厳しい現場の流れに乗れず、戸惑いのあまり、立ち往生してしまうことがある。実習指導者からは消極的学習姿勢とみなされて評価がわるくなる恐れがある。非常に緊張する学生は普段の実力が発揮されにくい。実習初期から担当教員が巡回指導し、コミュニケーションスキルを高めるよう援助し、指導者との間を調整する場合もある。担当教員は巡回時指導時、まず学生の訴えを傾聴し、実習に対する適応状況を把握する。また記録の点検、記録方法の指導、介護技術の習得状況を把握し、学生に指導助言する。実習遂行上に支障があれば、学生と実習指導者との間を調整する。

実習の配属先決定に際しては、施設の特徴と学生の個性を考慮し、担当教員の集団討議を経て決定している。実習開始後も頻繁に学生の状況を把握し、施設指導者と連絡調整を行い、実習環境を整えるよう援助している。

実習終了後は引き続き実習指導Ⅰの授業で、小グループ指導及び個別指導を行い、実習で学んだことを定着させる。実習前後の学生状況を把握し個別指導を継続するために、教員1人が担当する学生数は10-13名とする。

6) 受け持ち利用者の事例検討における学び

介護過程・問題解決方法理論は利用者本位の介護を科学的に展開するための援助方法理論である。学生時代に基本的なアセスメント技術を学び、利用者の要望（ニーズ）に見合った介護計画をたてるための技量を身につけることが求められている。2年次前期の介護実習Ⅲでは、受けもち利用者の個別介護計画を立て実践し評価する。2年次後期には実習指導Ⅲにおいて、この結果について事例

検討をおこなう。事例検討において81%の学生は学びがあったとのべている。アセスメントの大切さと大変さが学べた5人(9.2%)、介護過程の大切さ4人(7.4%)、介護目標の立て方4人(7.4%)、コミュニケーション方法4人(7.4%)、一人ひとりに合った介護が重要である6人(11.1%)、利用者理解の方法が分かった6人(11.1%)、などが多くを占めた。

事例検討では他の学生の経験からも学び、自己の介護観を確立することに有効であった。受け持ち利用者の事例検討で困ったこととしては時間不足、利用者のためになったか自信がない、など自己の計画の未熟さを反省している。実際の介護現場では利用者状況の変化により学生の計画を実施できない場合もある。挫折からも学ぶことができることを教員がサポートする。得られた結果に対して謙虚に振り返る誠実さを身につける。学生時代に利用者本位の理念を身につけた学生は、職業人になってからも規範的なケアをおこなうことができる。

人間は一生涯発達し続ける存在であるという視点は重要である。利用者の潜在能力の活用はQOL(Quality of Life)を支援する介護福祉士としての重要な役割である。身の回りの世話にとどまらず、人間としての無限の能力の開発に力を注ぐことは、高齢者・障害者の自立支援を目標としたこれからの介護福祉士に期待される役割である。本学の目指すヒューマンズ理論の実践としても重要視している。

7) 実習指導室の役割、学生の居場所

実習指導室の存在が役に立ったとする学生は74%と多かった。記録によれば1日平均5-10名の学生が相談に訪れる。実習指導室の役割は実習に関する実務のすべてをまかなうために、学生との接点が非常に多い。提出物の受け取り点検の場面でさりげない会話を通して学生の悩み事を知り要指導学生の把握し生活指導に結びつけている。学生にとって安心して相談に赴くことが出来る場所である。実習助手が学生と年齢的に近いことで、

学生の気分や感情に共感し、日常会話の中から本音を引き出している。どの様なことでも話せる場所として、学生からの信頼度も厚いものがある。

学生生活上の困難や人間関係の悩みなども自然な会話の中から引き出している。悩みを持つ学生も、はじめから関係部署に相談しに行くとは限らない。そのような学生に対してはコンサルテーション機能を果たしている。学生の状況により、同伴したり、連絡をしたりなどのきめ細かな援助をしている。学科会議では学生情報交換にキーパーソンとしての役割を果たしている。保健センター、学生相談室カウンセラーなどとの連携の役割を果たしている。

学生の社会性が未熟であることが懸念されている。実習指導室においては、あいさつ、敬語の使い方、高齢者との会話、礼状の書き方、電話のかけ方、記録の書き方など丁寧に指導して学生からの信頼も厚い。学生との距離感が近いのは介護福祉士の有資格者であることにもよる。2年生は、進路検討の際にも、実習助手に相談に乗ってもらっている。進路の悩みを持つものには卒業生の情報なども提供しやすい。多様化する学生のニーズに答え、文章教室などの小集団指導も手がけている。学生の潜在能力を開発して、自己の潜在能力を伸ばす指導方法は学生の自信回復のために有用であり、実習指導室の暖かい励ましや面談が有効に機能しているといえる。

実習助手の役割はさらに授業支援においても発揮される。介護技術においては学生が教員のデモンストレーションを見て学習する。自分で身体を動かし覚えたものは技術として身につく。その際には実習助手2名がアシスタントとして参加し支援する。学生の介護技術の習得状況を見極め、教員と協力し個別指導をする。また個別指導の必要がある学生を早期に発見し、学生同士の交流関係を把握し、実習施設の配属時などに考慮する資料となる。

個々の学生の動静をつかみ、学生の個性を見極めた指導援助が出来るのは、このように日々の授業

及び実習実務の多方面から学生と向き合い学生の状況をつかむ重層的な教育体制の良さである。

3. 考察と課題

1) ヒューマニズム教育の実践結果と課題

福祉援助学科においては一人ひとりの学生の個性を大切にして個別指導を重要視している。学生の意欲や理解力、介護技術などの実践力を高めるために個別指導を軸に学生の能力開発に努めている。

介護福祉士としての資格取得だけでなく一人の社会人として、成長発達を見守るために多面的方向から学生を把握し、複数の教員集団が個々の学生に対して統一された教育方針で個別性を尊重した指導教育を行っている。学生の生活力のゆがみが言われ、精神的に未熟な学生が多いといわれている。服部は(2003)精神的な未熟の原因は知育偏重、画一的な教育、親の過干渉、集団遊びの欠如などによる「経験欠乏症候群」であり、わずかの困難や試練で動揺すると述べている。介護現場では介護を要する利用者の尊厳を守るために、学生自らが利用者の自立を支援する実践を創造していかなければならない。自己決定、自己選択などの利用者本位の介護課題を理解し介護計画を案出し実施する役割がある。

要介護者の前で考え、創意工夫により利用者が心を開いてくれて、信頼関係を結ぶことができるように、笑顔・挨拶・相手の気持ちに届く声かけなどを瞬時に考案し、援助しなければならない。生活経験の浅い学生たちにとっては高齢者とのコミュニケーション技術は困難が大きい。そこで学生自身が心地よいコミュニケーション体験を経験することが重要であると考え、全面的に受容されるという安堵感を実感できるよう教員が支持的コミュニケーションを行うよう心がけている。マイナス評価をされ続けている学生にはプラス志向の対応をするよう心がける。やがては他者をほめることができるようになる。学生にとり、心が休まる人間関係のある居場所が必要である。自尊意識

が芽生え、その結果心地よさを感じる時、相手に対して同じように振舞うことができると考え、学生を尊重した対応を行うよう努力している。

施設で暮らす高齢者は住み慣れた我が家を離れ、これまでの生活とは異なる集団生活に入り不安な気持ちを抱えて困っている人たちである。介護者はその寂しさを理解し、不遇さを共感できなければならない。認知症（痴呆症）高齢者とのコミュニケーションはもっとも困難な課題である。学生たちは、はじめのうちこそ戸惑いを示すが、肯定的積極的声かけ技術をマスターすれば、そのような方々とも仲良くなれて、むしろ愛すべき存在であるとの認識を持つにいたる。認知症であるがゆえに現実認識は出来ないが、自分に対して、人格を尊重し、親しく接してくれる人を彼らは感じ分けることが出来るということを学ぶ。

人間関係を円滑に結び合い、相手のために良いことをするのは人間の可能性を信じるヒューマンズ精神の実践となる。

澤田は（2003）は人間の発達要求に関して、ユネスコの21世紀委員会の例を紹介している。秘められた宝とは「知ることを学ぶ」「なすことを学ぶ」「共に生きることを学ぶ」「人間として生きることが学ぶ」を挙げている。介護実習における相互変容のプロセスは「認識変容学習」の中で、自己を批判的に振り返る学習プロセスであり、「気付き」「問い直し」「行動変容」に至る過程で人間的成熟をもたらすと述べている。実習の中で自己変容を経験し、実習指導の中で振り返りと自己批判を行い、次の実習では反省に基づき行動変容を実践する。介護実習は学生から社会人への成長・発達の時期にあり、社会人としてどう振る舞うべきかを実践として学習する場である。教員集団は学生の成長発達を、後押ししていく意義ある事業である。

2) 重層的実習指導

実習指導室における学生指導方法は、学生を人格形成途中の人として、全人的に受容し、尊重する。そして良い点をほめる、改善点は指摘する。

また介護技術、実習指導及び授業、介護実習、実習実務という多面的な視点から学生指導を重層的に展開している。学生にとっては一方的、受身的な授業だけでなく、主体的に自ら学び、考える演習機会をおおくり入れることは大学教育としてふさわしく、学生にも受け入れられると思われる。実習の自己課題に役に立つ授業は自主的学習の根幹を成すものである。「介護概論」での身内の高齢者とのコミュニケーション体験で高齢者の好む話題や会話のコツをつかむ。「形態別介護技術」においては、障害を持つ当事者を招いて授業を体験し、障害を持つ人たちの気持ちに共感し、寄り添う介護を体得している。「医学一般」他で理解した専門知識を用いて実習時の受け持ち利用者の医学的な課題を予測できるなど、実習先での課題に活かす技術を身につけ専門介護職員として成長発達を遂げる。授業と実習とが有機的に学生の中で統合される。自己学習の課題の達成感が理解され学びを確信できると学ぶ面白さも分かるようになる。介護の奥深さ、人間理解の難しさを理解し生涯発達の課題を意識し、自分も相手も学び続けるという生涯発達の課題を認識する。全人的な発達を自らにも課す動機付けとなる。

人間教育に携わることの喜びを学生とともに教職員も実感できる。そのつなぎ目を果たするのが実習指導である。学生たちの討論をリードするために介護実習と実習指導の担当教員は同じ教員が一定期間は継続して小グループを担当し指導に当たる。

また先輩という横並びに寄り添う姿勢で、実習助手が指導助言する方法も学生に受け入れられる。教員がおこなう実技指導を受けて、グループ指導を実習助手が支援することにより、実技指導が補強され重層的な指導となる。

また施設実習という学生にとっては未知の領域に踏み込むことの不安を受け止め、励まし、支持的な助言をすることで、学生自身の主体的積極的な学習姿勢を引き出し、自分を成長させようとする動機を強める。学生を「ほめる」、「認める」、「受け入れる」、「支持する」というスタンスが指

導のポイントである。学生たちが自ら自立的に実習に取り組み、結果について自己批判・自己評価することにより自己理解を深める。さらに失敗の体験も貴重である。そこから多くの学びがあることを自覚させる。“他者からたたかれる”ことになれて、忍耐強くなり柔軟な対応を学ぶ機会となる。

4. 今後の課題

1. 学生の学習能力の差異に対する理解と授業改善工夫は引き続きおこなっていかなければならない。わかりやすい授業、関心を惹く授業にする必要がある。また、関係領域との連携協力が必要である。実習と関連づけて、実例を通して謎解きになるような興味ある授業を工夫する。また学生が実習で見出した問題意識を継続して追及していけるよう課題解決の方法を探り、学ぶ喜びを実感できるように導く。

2. 関連部門との密接な連携が必要である。保健センター、学生相談室とは個別の学生状況の情報交換をおこなう。教務課や学生課とは学生の学習進捗の報告と理解を求めするために、学生の状況を共有し成長を見守りたい。学生の置かれた生活背景を把握し教育環境を改善するために、学園内が一致して教育に当たる必要がある。学生によっては保護者とも密接に連絡を取りあい学生生活の改善のために側面協力を依頼する。多彩な学生が入学するので、積極的に情報交換し問題があれば早期に援助する。

3. 学内の意思統一を図り、実習指導に関わる教職員体制と、授業関連部門が相互協力し重層的・総合的に学生を理解する必要がある。睡眠時間の不足、食事不規則など健康上に問題があれば、家庭教育の領域（基本的な生活習慣など）についても学校でも指導しなければならない。授業時その他の機会においても接触を深め学生への全人的教育指導を心がける

4. 事例検討発表会のレポート作成指導を強化し創造的な援助の工夫をまとめさせる。先行研究、

文献検索などの研究手法を用いて、より高度な事例研究となるよう指導援助を心がけたい。学生が自ら体得した介護実践を理論化、体系化できるよう教員自身も研究的創造的活動を重視したい。

結論

介護実習及び実習指導における学生指導の重要性が判明した。教職員が学生と全人的接点を持ち、授業及び実習指導、教育実務など、多角的な方向から学生を把握し、重層的に指導することが良質の介護福祉士養成教育に不可欠である。今後も福祉援助学科においては実習指導センターと関連部門と連携協力関係を維持し学生を総合的に重層的に指導支援することが望ましい。

学生が主体的、自主的に学習に取り組み介護実習において学べた実践を振りかえり事例研究方法を深め事例としてまとめさせる。全人的成長を図り、もって実践的研究の初歩を学び専門的職業人としての生涯発達の契機になるよう支援する。またヒューマンイズムの実践者として学ぶ喜びを身につけさせたい。

最後に、施設の実習指導者の方々が使命感をもちつつ寛容なお気持ちで、学生の実習を受け入れてくださり、骨身を惜しんで指導していただいている。生活体験の乏しい学生たちが、実習で学びを得るためには、多くの現場の実習指導者の方々が後輩を育てるために献身的なご努力の賜物であることと衷心より感謝の意を表したい。

参考文献：

- 服部祥子，人をはぐくむ人間関係論，医学書院，94-96，2003
- 澤田信子，小櫃芳江，峰雄武巳 介護実習指導方法，全国社会福祉協議会，26，2003
- 一番ヶ瀬康子，介護福祉士はこれでいいか，ミネルヴァ書房，1998
- キャサリン・ポープ，ニコラス・メイズ，大滝純司監訳 質的研究実践ガイド 医学書院，2001